

先

日、私は素足で蛞蝓なむぐしを踏んでしまった。愛犬のミニーと庭に出てボール投げをしていたら、サンダルから足を踏み外し、踵でぐりと潰したのだ。ぬめったものが潰れる感触に一瞬ぞっとする気持ち悪さを覚えた。しかし、足裏の蛞蝓にとつて事態はずっと深刻である。夕露を嘗めながら秋の草陰を這う、季節外れの蛞蝓を、身丈も体重も何千倍もあろうこの私が踏み潰したのだ。踵を上げる時、ほんの少しべたつとくつつくような抵抗があった。

ボール投げに戻っても、蛞蝓の感触がどこかに残っている。

ニューヨーク郊外で育った私は、小さい頃、春から秋にかけてずっと裸足で近所を遊び回っていた。今でも実家に帰るとよく裸足で裏庭に出て、家庭菜園からトマトやアスパラガスやらを採ってくる。よそではどうか分らないが、家の近所では本格的な外出でない限

り、夏は靴を履かないのが流儀である。だから蛞蝓を踏んづけた時の感じも、なるべく開けたくない小さな記憶の引き出しの中に、私の世界の一部として保管されているのだ。しつかりぬめぬめと、いつもそこにある。

しかし、よく考えてみると蛞蝓の踏み心地が些細な一部を形成している「世界」は、実家の近辺にだけ限られていた。その小さい世界を離れる時はいつも靴を履き、車か電車か飛行機に乗り、また別の世界に移る。

私が今暮らしている東京八王子では、庭に出る時はいつもサンダルを履く。もちろん、それは靴を履くか履かないかで屋内と屋外とを区別する、アジアに共通する靴文化の中で生活しているからだ。そういういった知識も、私の世界の一部を形成している。しかしこの頭だけの知識は、蛞蝓を踏んだ時の強烈な感触ほど真に迫ってはくなく。

違う地域に住む人々がどんな文化の中で生きているかを知ることには、とても大切に違いない。しかし、そんな知識が、どうも私には時折しつくりこないことがある。ほんとうは人々が文化の中で生活するのではなく、逆に文化が人々の中に息づくのではないかと。それは、蛞蝓の感触が私の中に閉じ込められていたように、普段気が付かないほど小さな、夥おびただしい記憶の累積として刻み込まれている。そんなふうに実家の近所という小さな世界のことを思い出したら、蛞蝓を踏んだ時の気持ち悪さも急に懐かしいものに思えた。☺

足裏の感触

マイケル エメリック
Michael Emmerich

翻訳家・日本文学研究者